成長物語としての『銀河鉄道の夜』

――ジョバンニとカムパネルラ――

蔡　暉映

はじめに

宮沢賢治の代表作の一つである『銀河鉄道の夜』は、一九二四年の夏頃から賢治が死去する一九三三年まで、十年間の間改稿を重ね続け、ついには未完のまま遺された作品である。その原稿の複雑な改稿過程は、天沢退二郎、入沢康夫両氏によって整理され、一九七四年の『校本宮沢賢治全集』（第九巻、第十巻）の刊行によってその成果が公となり、さらに、一九九五年の『新校本宮沢賢治全集』（筑摩書房）においては、「第一次稿」から「第四次稿」（最終形）までの四段階のテクストが活字化された。

現在、『銀河鉄道の夜』に関する研究は、作品を賢治の体験、思想、宗教観などと関連付けた研究はもちろんのこと、テクストの推移による内容面、思想面の変化、さらには作品の主題、人物像に焦点を当てたものなど、実に多彩な方面にわたって考察が進められている。その内、ジョバンニとカムパネルラについては、作品の外側に存在する作者の体験と照らし合わせ、カムパネルラをその妹・トシとする説や、友人・保坂嘉内とする説と[1]、そこから展開し、賢治の様々な作品に登場する「同伴者」としての「二人」を考えるものや、「ひかりの素足」と対比させるものも少なくない[2]。一方で、「銀河鉄道の夜」という作品の内部に焦点を当て、ジョバンニとカムパネルラの関係について論じたものとして、村瀬学、別役実、内田寛、竹内美和などの論が挙げられる[3]。本稿では、作品の内部に焦点をあて、『銀河鉄道の夜』を主人公・ジョバンニの成長物語として考えることで、ジョバンニとカムパネルラの関係を中心に考察を進めたい。

『銀河鉄道の夜』がジョバンニの成長物語であることは、既に様々な論者によって指摘されていることである。そして、

ジョバンニの成長にカムパネルラの存在が大きな意味を占めていることも否定できない事実であろう。だが、従来論じられている「成長物語」としての『銀河鉄道の夜』は、孤独な少年・ジョバンニが異世界へ旅立ち、他者との人間関係を広げ、現実へと戻り、旅立つ前には手に入れることの出来なかった牛乳を獲得し、成長するという流れが自明の理となっており、その詳細な内実は明らかにされていないように思える。よって、本論文ではジョバンニの変化の過程を、カムパネルラとの関係を軸として詳細に分析することを試みたい。

その際、現在最も広く流布している「第四次稿」（最終形）をテクストとし、必要に応じ、その他の段階のテクストを参照する。本論における引用は全て『新校本宮沢賢治全集第十巻』（筑摩書房、一九九五年）、『新校本宮沢賢治全集第十一巻』（筑摩書房、一九九六年）により、また、引用文における傍線は全て引用者による。

一、ジョバンニとカムパネルラの位置

『銀河鉄道の夜』は最終形では夢という形式が採られているものの、父不在の状況で（姉と共に）病弱な母の世話をし、朝夕アルバイトを掛け持って家計を助けている少年ジョバンニが銀河鉄道の走る異世界へと行き、再び戻る物語である。その旅の同行者としてカムパネルラが登場する。最終形とされる物語に「一、午后の授業」、「二、活版所」、「三、家」が加筆されるまで、カムパネルラは、ジョバンニが一方的にその環境に羨望の眼差しを向け、友達になりたいと憧れる対象であった。その思いは以下の第三次稿（初期形三）の引用から伺うことができる。

> ぼくはどうして、カムパネルラのやうに生まれなかったらう。カムパネルラなら、ステッドラーの色鉛筆でも何でも買へる。それにほんたうにカムパネルラはえらい。せいだって高いし、いつでもわらってゐる。（中略）ぼくがカムパネルラと友だちだったら、どんなにいゝだらう。

> ぼくはもう、遠くへ行ってしまひたい。みんなからはなれて、どこまでもどこまでも行ってしまひたい。それでも、もしカムパネルラが、ぼくといっしょに来てくれたら、そして二人で、野原やさまざまの家をスケッチしながら、どこまでもどこまでも行くのなら、どんなにいいだらう。（中略）ぼくはもう、カムパネルラが、ほんたうにぼくの友だちになって、決してうそをつかないなら、ぼくは命でもやってもいい。

一方、ジョバンニのこうしたモノローグを大幅に削り、彼

の現実世界での生活描写を物語の前三章として加筆した最終形において、二人の関係は、父親同士が幼い頃からの友人であり、過去にジョバンニの家の境遇が良かった時に、一緒にカムパネルラの父の書斎で雑誌を広げ、アルコールで走る汽車で遊んでいた幼馴染へと変更されている。内田寛はこうしたカムパネルラの設定変更により、ジョバンニを疎外する同級生たちを学校集団の中心にいたカムパネルラが「黙認」していることは、幼馴染であった二人の友情への「背信行為」であり、こうした人間の不確実性はジョバンニをより深く傷つけ、銀河鉄道の旅行へと駆り立てるのだという。[4] 他方、村瀬学はそんなカムパネルラを「青年期へ出立する者」としてジョバンニの「少年の主観性」と対立させており、[5] また、別役実は、同級生と比べて早熟なカムパネルラが孤立しているジョバンニに対してみせる沈黙を「父親的」としている。[6]

果たして内田寛の主張するように、内向的性格のジョバンニと対照的な外向的性格をもつカムパネルラは「ジョバンニを見限り、二人の世界を解消し、より広い世界を獲得した」[7]のであろうか。もしくは、村瀬学、別役実の言うように、カムパネルラがジョバンニよりも大人びていたのだろうか。後述するように、筆者は必ずしもジョバンニがカムパネルラよりも内向的性格であるとは考えない。むしろ、年配者との応対はジョバンニのほうがより社会性を持っているのである。また、二人の友情は既に存在しないとする内田寛によれば、銀河鉄道の列車に乗っているカムパネルラはジョバンニの願望が実現した結果であるが、それではなぜカムパネルラが「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎ひにきたんだ。」とジョバンニが知らないはずの現実世界に起きたことを知っているのだろうか。やはり、別役実や吉本隆明らが主張するように、二人の間には友情が存在したのだろう。[8] そして、二人が互いに対して抱く関心により、現実世界のカムパネルラが、ジョバンニの夢である銀河鉄道の旅に影響を及ぼしていると考える方が妥当であるように思われる。

現実で既に異なった境遇にいる二人が、銀河鉄道の旅へと共に出立できたことは偶然ではあるまい。他の同級生が「ずゐぶん走ったけれども遅れてしまった」のに対し、ジョバンニだけが乗り込めた理由には、彼のカムパネルラに対する一方的な思いだけでなく、カムパネルラにとってのジョバンニの大切さも作用していよう。カムパネルラが突然「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」と、「思ひ切ったといふやうに、少しどもりながら、急きこんで」言う場面は、相手がジョバンニだから口に出来たのである。同級生や周囲の大人からも信頼されているカムパネルラは、他人の前ではこのように弱気な言葉を口にしないだろう。カムパネルラにとってもジョバンニは、母に対する自分の深い思いを吐露で

きる、共通の記憶を持った相手なのである。ジョバンニとカムパネルラの関係に対する改稿により、二人の銀河鉄道の旅の動機はより説得性を持つように思われる。

従来の研究において、カムパネルラは同級生の保護者的な、大人びた存在として語られてきた。その根拠は、ザネリを助けるカムパネルラの行為や、ジョバンニの母の信頼、ジョバンニの羨望の眼差しなどによるものが大きい。つまり、カムパネルラの成熟した印象は主にジョバンニとの対比によって浮かび上がる特徴なのである。だが、『銀河鉄道の夜』において大きな部分を占めるジョバンニのモノローグを取り除き、ジョバンニとカムパネルラの行為のみに視線を向けると、興味深いことが見えてくる。

まず、現実世界でのジョバンニの生活が描写されている第一章から第三章では、「一、午后の授業」でのモノローグ以降、ジョバンニの心の声は隠されていることに気づく。例えば「二、活版所」では、「大きな扉」の奥にいる「高い卓子に座った人」から仕事を受け取り、黙々と「壁の隅へしゃがみ込み小さなピンセットで」粟粒のような活字を拾い、報酬として無言のうちに「小さな銀貨」を受け取るジョバンニの姿が、彼とは一定の距離を保った語りによって描写され、「高くて大きい」成人たちの世界と少年であるジョバンニが対比されている。ジョバンニの背後を通った人が「青い胸あて」をしていたことは、ジョバンニに知る由もないことである。このような第二章の語りは、働く大人の世界におけるジョバンニの「幼さ」を効果的に強調している。次に、会話劇のように展開される「三、家」においても、ジョバンニの思考は全く表面に現れず、読者は元気よく口笛を吹きながら食料を買い、「勢よく」帰宅して病弱の母を気遣いながら普通の学校生活の会話をする少年の表面的な姿を見るのみである。

こうした描写の中で、注意を引くのがジョバンニの礼儀正しさである。活版所の短い描写の中で、彼は四回もおじぎをしており、さらに牛乳屋でも帽子をぬいで挨拶をし、牛乳を「貰ひにあがった」と敬語を使い、帰り際にもおじぎをしている。ジョバンニの礼儀正しさは、プリシオン海岸にて「ではわたくしどもは失礼いたします。」と「ていねいに大学士におぢぎ」していることや、雁を薦める鳥捕りに対する遠慮や、りんごを手渡す青年に対して「立って」礼を言う場面などにも見られる。このような強調された礼儀正しさは、同じ年齢であり、同級生の中でも中心的人物であるカムパネルラには見られない。むしろ、作中でのカムパネルラの言動は、初対面の鳥捕りに対して「いきなり、喧嘩のやうにたづね」たり、カササギを烏と間違えた女の子に対して「何気なく叱るやうに叫」んだりするなど、二度にわたってジョバンニを思わず笑わせている。家庭の事情のため母の世話をしつつ、

仕事もせざるを得ないジョバンニの方が、他者との対応においては社会性を身につけているのである。

これまでの研究において、論者たちはカムパネルラをあまりに理想化しすぎていたのではないだろうか。確かに同級生と比べると大人びてはいるが、カムパネルラもまたジョバンニと同年齢の少年なのだ。人の成長を少年から青年へ、青年から成人への過程と考え、この二人の少年を比較するならば、背も高く、同級生の輪の中心に位置し、ザネリを助けるために川に入ったカムパネルラは、同級生の少年たちよりも一足先に青年の領域に入りつつあったのだと言え、一方、ジョバンニは少年であるべき者が、青年へと成長する前に環境に迫られ、成人の領域へと足を踏み入れてしまったのだと言えよう。そのため、ジョバンニには少年の幼さと成人の社会性が共存しているのである。

学校で教育を受け、親によって育てられるべき存在である少年でありながら、母親を養うという成人の役目を担うことによって、ジョバンニは少年の世界の異端者となり、また成人の世界からも認められていない[10]。そのストレスによって彼は「まるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないといふ気持ちがする」のみならず、脇明子の指摘するように、その疎外感や孤独感によって、現実世界から遊離さえしている[11]。ジョバンニが家を出てから銀河鉄道に乗り込むまでの地の文に、ジョバンニの状態や見えるものを形容する「ぼんやり」という言葉が六回も出現することは、言葉に強いこだわりを持つ宮沢賢治の文章において決して偶然ではあるまい。

「少年」と「成人」の二つの世界に跨るジョバンニの精神状態は、すでに限界に近い。『銀河鉄道の夜』をジョバンニの成長物語として考えた場合、カムパネルラの役割は、一足先に青年の領域を覗いている者として、ジョバンニの背中を押して青年期へと誘い、それにより、ジョバンニに内在する「少年」と「成人」のギャップを埋めることなのではないだろうか。

このようにカムパネルラの役割を考えた際、『銀河鉄道の夜』を読み解く大きなキーワードだとされている「ほんとうの幸」という言葉が初めて提起される箇所は大きな意味を持つ。

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」
いきなり、カムパネルラが、思ひ切ったといふやうに、少しどもりながら、急きこんで云ひました。
ジョバンニは、
（あゝ、さうだ、ぼくのおっかさんは、あの遠い一つのちりのやうに見える橙いろの三角標のあたりにゐらっし

ゃって、いまぼくのことを考へてゐるんだった。）と思ひながら、ぼんやりしてだまってゐました。

「ぼくはおっかさんが、ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだらう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらへてゐるやうでした。

この銀河鉄道の旅でジョバンニが次第に深く追求するようになる「幸」はカムパネルラによって提起されているのである。だが、ジョバンニは「ぼんやりしてだまって」いたり、「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないぢゃないの」と、驚くだけである。[12] この時のジョバンニには、「幸」に関する抽象的な議論を交わす能力も、カムパネルラを他者として考え、彼の事情に眼を向けるというゆとりもない。このジョバンニとカムパネルラの対話を、銀河鉄道の旅の最後に交わされる二人の対話と比べてみよう。

ジョバンニはあゝと深く息しました。「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一諸に行かう。僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない。」「うん。僕だってさうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでゐました。「けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう。」ジョバンニが云ひました。「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云ひました。「僕たちしっかりやらうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新しい力が湧くやうにふうと息をしながら云ひました。

（中略）ジョバンニが云ひました。

「僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。きっとみんなのほんたうのさいはいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一諸に進んで行かう。」

この物語の最後では、ジョバンニが力強く会話を主導し、カムパネルラが最初に提起した「おっかさんのいちばんの幸」を「みんなのほんたうのさいはひ」へと拡大して模索しようとしているのとは対照的に、カムパネルラはまるでその役目を果し終えたかのように「ぼんやり」しているのである。このように、二人の立場が逆転していることは、「少年」であったジョバンニが「青年」の領域に足を踏み入れていたカムパネルラに追いつき、追い越したことを示している。こうした変化をジョバンニの「成長」と仮定し、銀河鉄道の旅を体験する二人の関係から、ジョバンニの成長を促した要素を抽

出することを試みることとする。その際、「青年」として備えるべき能力として、他者への眼差しを獲得することと、抽象的な思考ができることを挙げる。

二、他者への眼差しの獲得

上に引用したカムパネルラが「幸」を提起した場面の後に、列車は白鳥の停車場に到着する。この箇所のジョバンニとカムパネルラを見ると、地の文に「二人」という言葉が頻出しており、二人はほとんど同じ動作と反応をし、同化しているようである。会話の文もどちらが話しているのか区別できないものが多い。二人の差と言えば、カムパネルラが地図や腕時計などの工具で冷静に状況を確認していることや、ジョバンニが前述のように礼儀正しく大学士に接していることぐらいだろう。こうした親密な時間は、「成人」の世界に潰されそうになり、世界から遊離しかけていたジョバンニをカムパネルラと一緒に遊んでいた無邪気な「少年」へと立ち返らせるのに必要な時間であったと言えよう。

だが、二人の行動や思考方法の違いは解消できるものではない。その差異は鳥を捕る人の登場によって明らかとなっている。鳥捕りと会話する場面では、初め、プリシオン海岸の場合と同じく発話者が分からない場合が多く、二人とも同じように鷺を「押し葉」にするということに対し不審を感じている。だが、捕らえられた鷺を眼にした時から、次第に二人の間にずれが生じ始める。それまで双子のように語られていた二人の行動や発言が分岐するのである。

鳥捕りが鷺を取り出した後の二人の反応を見てみよう。まず、二人とも「ほんたうに鷺だねえ。」と思わず異口同音に叫んでいる。その後、カムパネルラが「眼をつぶってるね。」と言い、そっと鷺の「白い瞑った眼」に触れている。そして、ジョバンニと鳥捕りの会話が続き、ジョバンニは雁を試食するのだが、この間、カムパネルラに関する記述は全くない。次に、カムパネルラが発話するのは、ジョバンニがもっと雁を食べることを遠慮し、鳥捕りが灯台守と会話を交わしてから後である。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さっきから、訊かうと思ってゐたのです。

この作品の他の場面におけるカムパネルラの動きや言葉に関する語りは、常にジョバンニの視点から推測されたような「カムパネルラは～のように…した」とあるのに対し、「思っていた」と確信した語りによってカムパネルラが主体性を持つのはこの一箇所だけである。このカムパネルラの質問に対して、鳥捕りは鷺の処理法を説明するが、その後やはりジョ

バンニの視点に立った形でカムパネルラの言葉が語られる。

「こいつは鳥ぢゃない。たゞのお菓子でせう。」やっぱり同じ事を考へてゐたとみえて、カムパネルラが、思ひ切ったといふやうに、尋ねました、（後略）

ジョバンニの夢である銀河鉄道の旅において、ジョバンニに寄り添った語りによって発せられた「やっぱり」という言葉には、カムパネルラと同じでありたいと願うジョバンニの心情が隠されている。だが、「ただのお菓子でせう」という言葉に到達するまでの二人の思考の経過は明らかに異なっている。ジョバンニが「チョコレートよりも、もっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでゐるもんか」と、食べた味覚を根拠として直感的に結論付けているのに対し、カムパネルラは鷺の眼に触れた触覚と耳にした処理方法への不信感を根拠にしており、「お菓子である」という結論に達するのにジョバンニよりも遥かに時間をかけており、その過程も抽象的である。

この過程の差異は、この時点においてジョバンニがその思考において、まだカムパネルラより幼く、抽象的な思考ができていないことを示している。一方で、この時ジョバンニは鳥捕りをばかにしながら鳥捕りにもらった雁を食べている自分を自覚するが、それは漠然としている。竹内美和は鳥捕りを「ジョバンニに初めて意識された他者」としており、この後「自己の内部に閉じこもり人との関係を築けずにいたジョバンニが、他者への思いを特定の人物から見知らぬ人々にまで急速に進化拡大させていくの」だと述べ、[13] また、三上満も「この「鳥捕りの人」との出会いと別れは、大人へのジョバンニの成長の、ひとつのステップであった。それはルソーが『エミール』の中で言っているような、「愛といえば自分への愛しか知らず、自分を愛するものへの愛しか知らない」子どもから、もっと大きな愛にめざめる青年へ至る、ひとつのステップである」と述べているが、[14] この時点において、「この男は、どこかそこらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべてゐるのは、大へん気の毒だ」と考えるジョバンニの意識は、鳥捕りに向かっているというよりはむしろ自分に向けられている。

ジョバンニが鳥捕りを真の他者として意識し、「なんだかわけもわからずにはかにとなりの鳥捕りが気の毒でたまらなくな」るようになったのが、ジョバンニが知らずに持っていた切符に関する事件以降であったことは、看過できないことであろう。それまでカムパネルラに憧れ、追随していたジョバンニは、この時自分が所有していた切符によって、初めてカムパネルラ以上の尊敬を周囲から得るのである。そして、

それはジョバンニに新たな自尊心を与えるのに十分な体験であったと言えよう。

この時点以前において、ジョバンニの自尊心の基礎となっていたのは、父が学校へ寄贈した標本であった。[15] だが、その父は今や何をしているのか行方がしれず、父が持ってくるといった「ラッコの上着」はジョバンニが皆からからかわれる原因となってしまっている。教科書を読む時間と引き換えに、活字を拾って得た賃金としての銀貨もまた、同級生との違いを痛感させるものでこそあれ、自尊心を与えることはない。そのため、ジョバンニは、同級生のリーダー的存在であり、先生や母からの信頼も厚いカムパネルラと幼馴染であったということでしか、自分を定義できなかったのである。

そんなジョバンニが初めて、カムパネルラ以上の尊敬の眼差しで見られたのが、この銀河鉄道の旅である。車掌の突然の出現に慌てたジョバンニは、ポケットにいつの間にか入っていた紙を「何でも構はない、やっちまへ」といった態度で差し出すが、切符を受け取った車掌の態度は、ジョバンニには予想もつかないものだった。

> 車掌はまっすぐに立ち直って、叮寧にそれを開いて見てゐました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしてゐましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいてゐましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだったと考へて少し胸が熱くなるやうな気がしました。

これはザネリに嘲笑されて胸が冷たくなったのとは正反対の反応である。周囲の人に一目置かれるという全く新しい体験によって、ジョバンニはカムパネルラと異なる自分を肯定することができた。こうして自我を確立する大きな一歩を踏み出したことによって、ジョバンニは自分をカムパネルラと異なった価値のある一個人として認めることができるようになり、新しい視線を鳥捕りに向けることが出来るようになるのである。

車掌が登場する前に列車が通過するアルビレオの観測所にある、重なっては離れるサファイアとトパースの透き通った球を、一時期は重なり合いながらも其々の道を歩みだすジョバンニとカムパネルラを暗示していると考えることはできないだろうか。この切符の一件の後、あれほど頻出していたジョバンニとカムパネルラの代名詞としての「二人」という言葉は列車がサザンクロスに到着するまで地の文にはほとんど見られることはない。

他人に尊重されるという経験を経て、ジョバンニは自己否定を抜け出し、他者として鳥捕りに眼差しを向け、「この人

のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年つゞけて立って鳥をとってやってもいゝ」とまで思えるようになるのである。そして、鳥捕りが消えた時には、それまでジョバンニに使われていた「ぼんやり」という言葉がカムパネルラに使われ、二人の立場に変化が生じる。

「あの人どこへ行ったらう。」カムパネルラもぼんやりさう云ってゐました。
「どこへ行ったらう。一体どこでまたあふのだらう。僕はどうしても少しあの人に物を言はなかったらう。」
「あゝ、僕もさう思ってゐるよ。」
「僕はあの人が邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕は大へんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともないと思ひました。

注目すべきことに、ここでジョバンニは追従するカムパネルラに対し、カムパネルラとの差異を強調するような新しい言葉を口にし、それを自覚しているのである。この時点で、ジョバンニは既に銀河鉄道の旅の終盤において示す会話の主導性を握りつつあるように見える。本論は、先に青年として備えるべき能力として、他者への眼差しを獲得することと、抽象的な思考ができることを挙げていたが、この時点においてようやくジョバンニは他者への眼差しを獲得したのだと言えよう。その眼差しは、まずジョバンニの自尊心が満足されることなくしては得ることが出来なかったのである。

もう一つの要素としての抽象的な思考であるが、この点については次節において、カムパネルラが提起した「おっかさんのいちばんの幸」がジョバンニによって「みんなのほんたうのさいはい」へと拡大されていく過程から考察を進める。

三、抽象的な思考の成立

鳥捕りの消えた後に、りんごと野茨の香りと共に登場するのが、船難に遭った家庭教師の青年と二人の子どもである。そして、青年が二人の子どもの「幸福」のために下した選択を聞きつつ、「ジョバンニもカムパネルラもいままで忘れてゐたいろいろのことをぼんやり思ひだして眼が熱く」なるが、ここでジョバンニがふさぎ込みつつ考える「一生けんめいはたらいてゐる」誰か、「そのひとのさひはひ」は、依然として単一の対象を想定したものである。ジョバンニが最終的に追い求めることになる「みんなの幸」は、利己的な生を悔いたために「まことのみんなの幸のために」燃え続ける火となった、蠍の火の話に触発されたものであった。

青年によって提示された「さいわい」と蠍が求めた「さい

わい」から、ジョバンニが自らが追い求める価値観として後者を選ぶまでに、ジョバンニにどのような変化があったのだろうか。ジョバンニに提示されるこの二つの話の間に起きた事柄を見ていくことにする。

先述の青年の語りの後に、ジョバンニとカムパネルラは灯台守のりんごを勧められる。ここで、ジョバンニとカムパネルラは「坊ちゃんがた」と呼びかけられるのだが、ジョバンニは坊ちゃんと呼ばれたのがしゃくにさわり、わざと黙っている。だが、カムパネルラが礼を言ったため青年が二人それぞれにりんごを渡すと、ジョバンニはわざわざ立って礼を言うのである。この立つという動作の裏に、礼儀にかこつけてのジョバンニのささやかな反抗らしきものを汲み取り、周囲の嘲笑に沈黙を通していたジョバンニの自尊心の変化を見るのは行きすぎだろうか。

一方、カムパネルラには「坊ちゃん」と呼ばれることに対してジョバンニほどの反応は見られない。冒頭の授業内容や同級生たちの言動から、二人は「坊ちゃん」と呼ばれてしかるべき年齢であったと推測でき、また、カムパネルラもそれを違和感なく受け入れている。では、ジョバンニは何故この言葉に対して「すこししゃくにさわって」いたのだろうか。[16] ジョバンニはどんな風に呼ばれたかったのだろうか。ジョバンニが働いて賃金を得ており、母を支えていることは、青年も燈台守も知る由のないことである。しかし、成人の世界を覗いてしまっていることこそ、ジョバンニとカムパネルラの決定的な差異であり、その違いが「坊ちゃん」という言葉への反応として現れているように思われる。

文中ではこの後暫く二人は登場せず、りんごに関する情報が語られる。次に二人の言葉が発せられるのは、青年と一緒に登場した女の子・かほる子がカササギを烏と間違え、カムパネルラが「また何気なく叱るやうに叫び」、ジョバンニが「また思はず笑」う箇所である。このかほる子によって、ジョバンニとカムパネルラの関係は大きな転換を迎える。

ジョバンニはカムパネルラと女の子の何気ない会話に、「俄かに何とも云へずかなしい気がして」、「こわい顔をして」列車から降りることをカムパネルラに伝えようとしている。脇明子氏は、この作品の稀有な迫力の秘密を、銀河の情景に投影されたジョバンニの心理描写だとしているが、[17] まさに、「川が二つにわかれ」たその場面から、それまで双子のように行動を共にしていたジョバンニとカムパネルラの訣別が表面化するのである。女の子と次第に仲良くなっていくカムパネルラに、ジョバンニは突然の疎外感を感じるのだが、ジョバンニの反応がカムパネルラに対してというよりは、かほる子の反応に影響されていることは興味深い。[18] それは「美しい頬をかゞやかせながらそらを仰ぎ」話しかけてくる女の子に

対し、「生意気ないやだいと思ひながらだまって口をむすんでそらを見あげ」るというジョバンニの、これまでにない激しい反応にも見ることができる。そして、ジョバンニが窓の外に顔を出したまま口笛を吹き、カムパネルラが窓の中で地図を見るという、二人が異なる方向を見つめるという状況で、初めてジョバンニは「どうして僕はこんなにかなしいのだらう」と、それまで極めて漠然と存在していた自分のかなしみを正視する。

（どうして僕はこんなにかなしいのだらう。僕はもっとこゝろもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうっと向ふにまるでけむりのやうな小さな青い火が見える。あれはほんたうにしづかでつめたい。僕はあれをよく見てこゝろもちをしづめるんだ。）ジョバンニは熱って痛いあたまを両手で押へるやうにしてそっちの方を見ました。（あゝほんたうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだらうか。カンパネルラだってあんな女の子とおもしろさうに談してゐるし僕はほんたうにつらいなあ。）ジョバンニの眼はまた泪でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行ったやうにぼんやり白く見えるだけでした。

ザネリにからかわれては「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのだらう」と自分以外のものを責め、さらに「ぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかなからだ」と考えていたのに対し、ここで疎外感を感じたジョバンニは、傍線部にあるように、自分の気もちを正視し、自分がとるべき態度をはっきりと決めている。自分の内面に沈潜したこの内的独白は、ジョバンニにとっては初めての抽象的思考であり、正に青年期に踏みだした彼の第一歩といえよう。波線部に示すように、この時点でジョバンニは既にカムパネルラが彼と異なる個別の存在であり、どこまでも一緒に行くことはできないのだと気付いている。この時の二人の関係は、もう単純に一緒に遊んでいた幼馴染同士ではない。ジョバンニは「青年」の領域へと成長しており、元来身につけていた「成人」としての経験によって、カムパネルラに追いつき、追い越しつつあるのだ。そうしたジョバンニの変化を知るカムパネルラは、両手で顔を半分隠しつつ窓の外を見つめるジョバンニのそばで、さびしそうに星めぐりの口笛を吹く。最初からねずみ色の切符を持っており、地図をもらっていたカムパネルラは、「どこまでも勝手にあるける通行券」を持ったジョバンニと違い、自分が下車する場所を知っている。彼がことあるごとに地図を見る動作は、ジョバンニとの迫りつつある別れの時を予期しつつ待つ

動作のようにも見える。

ジョバンニは幾万の渡り鳥が飛び立つ場面で自分の「内なる世界」に目を凝らし、次いで、列車が高原を登りきった場所で、踊るような足取りで鶴を射落とすインディアンを見、列車が「決して向ふからこっちへは来」ることのできない傾斜を一気に下る時、その急な傾斜の途中でひとりの子供がしょんぼり立っているのを見る。傾斜の途中に見える子どもは幼かったジョバンニとの決別を連想させる。どんどん傾斜を下る列車の中で「思はずカムパネルラとわら」うジョバンニは、完全に青年期に踏み入っているといえよう。汽車から見える、カムパネルラの地図にも記されていない旗の存在は、カムパネルラが先導していたこの旅で、ジョバンニが彼を追い越したことを暗示している。再び川原を走る列車の中で、ジョバンニは女の子とも気楽に話せるようになるのである。

四、「みんなの幸」へ向かって

このようにして、ジョバンニは成人の経験を持つ青年へと成長した。そして、蠍の火の話を聞くのである。蠍の話を聞いた後のジョバンニの反応は語られていない。だが「あかるくあかるく燃えた」「ほ〔ん〕たうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火」へと注がれるジョバンニの視線は熱い。現存している原稿では、蠍の火の後に宮沢賢治がどのようなエピソードを書こうとしていたのか知る由はなく、列車はサザンクロスへと到着する。ジョバンニたちと別れたくない様子の男の子に家庭教師の青年は「きちっと口を結んで男の子を見おろしながら」降りることを主張する。それを見かねたジョバンニは、青年と「本当の神さま」について議論をするのである。年上の家庭教師に対し、ジョバンニが十分に言葉で答えられるはずはない。だが、自分の選択によって二人の子どもの未来を決定していながら、銀河の森から聞える「何とも云へずきれいな音いろ」の音楽に「ぞくっとしてからだをふるふやうに」し、汽車の後ろから聞えてくる賛美歌に「さっと顔いろが青ざめ」、合唱者と合流しようとしつつそれが出来ないでいる青年が主張する「神」や「幸福」に、ジョバンニは違和感を感じていたのだろう。この神に関する議論や、つらそうに列車を降りる女の子との離別が、「みんなのほんたうのさいはいをさがしに行く」ことをジョバンニに決断させた最後の契機であると思われる。

本論の最初に、カムパネルラの役割は、一足先に青年の領域を覗いている者として、ジョバンニの背中を押して青年期へと誘い、それにより、ジョバンニに内在する「少年」と「成人」のギャップを埋めることであると述べた。ジョバンニはカムパネルラとの銀河鉄道の旅によって他者への眼差しを獲得し、自分の内面と向き合った抽象的な思考を経験し、

少年から青年へと脱皮した。そして、様々な「幸」の概念に触れたジョバンニが、まだ未確定ではあるが、蠍の火とは別のより大きな幸を求めることを決意していることは、「僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない」、「僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない」、「きっとみんなのほんたうのさいはいをさがしに行く」という言葉から分かる。

だが、唯一、ジョバンニがまだ受け入れることのできないのは、「離別」の経験である。ジョバンニは人間がみな異なる個体であること、人間が孤独であることに気づいている。気づきつつ、サザンクロスで「僕たち」はどこまでもいける切符を持っているから一緒に乗って行こう、と男の子に言ったその言葉の背後には、共に歩む仲間を希求して止まない彼の幼さが残っている。所持する切符の違いからも暗示される離別を正視したくないジョバンニは、自分の切符を「僕たちの切符」だと言い張り、幾度もカムパネルラに「どこまでもどこまでも僕たち一諸に進んで行かう」と言うことで孤独から眼を逸らそうとする。しかし、その願いは、既にザネリを救うことで「幸」に対する選択を行ってしまったカムパネルラが叶えようとしても、叶えることの出来ないものである。銀河鉄道の旅でのカムパネルラの最後の役割は、人々の求める「幸」は人それぞれのものであり、人間は結局のところ孤独であるという事をジョバンニに悟らせ、彼の前から消え去ることであった。

おわりに

『銀河鉄道の夜』を、一つの成長物語として読んだとき、そこには少年と成人の二つのありかたに引き裂かれたジョバンニを青年へと成長させようとしたカムパネルラとジョバンニの物語がある。現実に戻ったジョバンニの眼には「さっきよりは熟した」町の風景が、「うつくしくきらめ」く蠍座の赤い星以外には「ぼんやり」とした天の川の風景と対比して映る。これは、ジョバンニがすでに現実の世界に属していることを示している。彼は、先の「牛乳屋の黒い門」ではなく「ほの白い牧場の〔柵〕」を通り、以前と全く異なった丁寧な牛乳屋の対応によって熱い牛乳を手に入れる。そして、同級生のマルソとも普通に会話をし、そこで初めてカムパネルラがザネリを助けて溺れたことを知るのである。中地文は、最終場面でカムパネルラの行方について何も言うことのできないジョバンニに言及し、言いたいこと、分かっていることを言葉にできないこの場面は冒頭の教室の場面と対応しており、ジョバンニの隔絶感、悲しみがより深刻になっているという。[19] だが、ここではむしろカムパネルラの「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」という言葉を思い出し、最後まで「ほんたうのさいはひ」とは何かと悩みぬき、結局

答えを得ることのできなかったカムパネルラの姿に、ジョバンニは絶句してしまったのではないだろうか。

銀河鉄道の旅で、「幸」という言葉を提起したのはカムパネルラである。彼はこの旅でジョバンニを刺激し、導く役割を担っている。そして、最後にジョバンニは、カムパネルラが自分を犠牲にしてなお得られなかった「ほんたうのさいはい」の答えを探しに、現実世界へと旅立つ。本論では、ジョバンニのそうした成長の過程を、カムパネルラとの関係を軸にして詳細に検討することを試みた。ジョバンニが経験する自己認識、他者の発見、孤独、内省、離別、価値観の決定などの過程は、誰もが青年へ、成人へと成長する過程で一度は通るものである。その普遍性のゆえに、ジョバンニの成長物語としての『銀河鉄道の夜』は、異なる世代、異なる言語の人々に受け入れられるのだろう。

注

1　トシ説を提起する代表的な論として、天沢退二郎・入沢康夫『討議「銀河鉄道の夜」とは何か』（青土社、一九六九年）、続橋達雄『宮沢賢治　少年小説』（洋々社、一九八三年）等があり、嘉内説を提起したものとして菅原千恵子・蒲生芳郎「『銀河鉄道の夜』新見――宮沢賢治の青春の問題――」（『文学』四十号（岩波書店、一九七二年八月））があり、吉本隆明「ジョバンニの父とは何か」（『梅光女学院大学講座論集第十三「文学における父と子」』（笠間書院、一九八三年））が追随している。

2　森井弘子「二人の物語としての「銀河鉄道の夜」検証」（西田良子編『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む』（創元社、二〇〇三年））、吉本隆明『宮沢賢治』（筑摩書房、一九八九年）、松田司郎「「分離」と「合一」のパターン――銀河鉄道のゆきつくところ」（『宮沢賢治』七号（洋々社、一九八七年））など。

3　村瀬学『『銀河鉄道の夜』とは何か』（大和書房、一九七八年）、別役実「ジョバンニとカムパネルラ」（『宮沢賢治』七号（洋々社、一九八七年））、内田寛「『銀河鉄道の夜』論――成長物語としての構造」（『日本文学誌要』六十三号（法政大学国文学会、二〇〇一年））、竹内美和「『銀河鉄道の夜』論――ジョバンニという名の少年――」（『金城国文』七十巻（金城学院大学国文学会、一九九四年））など。

4　内田寛「『銀河鉄道の夜』論――成長物語としての構造」（『日本文学誌要』六十三号（法政大学国文学会、二〇〇一年））、四八～四九頁。だが、カムパネルラがジョバンニへのからかいに対して沈黙を守っている箇所は第三次稿からのものであり、最終的に改稿が行われる可能性を残していたことも忘れてはなるまい。むしろ、第四次稿の冒頭、ジョバンニが答えられなかった質問を問われて、答えを知りつつ答えなかったカムパネルラを重視すべきではないのかと思われる。

5　村瀬学、前掲書、八八頁。

6 別役実、前掲書、二三〇頁。

7 内田寛「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』論――ジョバンニとカムパネルラ――」[『語文と教育』十四号（鳴門教育大学国語教育学会、一九九四年）]、二九頁。

8 別役実、前掲書、四九頁。及び吉本隆明『宮沢賢治』（ちくま学芸文庫、一九九六年）、七五頁。

9 なお、作中でジョバンニが笑う場面は四箇所あり、残りの二箇所は汽車が崖を猛スピードで下る場面でカムパネルラと一緒に笑うところと、その後女の子との対話において「機嫌が直って面白さうにわらって」答える場面である。

10 竹内美和は、ジョバンニは「保護される者」から「養う者」への変化を恐れていると述べ、その自己愛から子供時代の象徴としてカムパネルラを求めていたのだが、そうした排他的自己愛が鳥捕りとの出会いによって他者へと心を開くことになり、孤独が癒されるのだとする。[『銀河鉄道の夜』論――ジョバンニという名の少年――]（『金城国文』七十巻（金城学院大学国文学会、一九九四年）]。

11 脇明子「『銀河鉄道の夜』への旅」[『日本児童文学史を問い直す――表現史の視点から』（日本児童文学会編、一九九五年）]、一三八～一四〇頁。

12 別役実は前掲書において「ジョバンニにとっては少なくとも、カムパネルラは幸福であり、不幸であってはならなかった。それによってジョバンニは、自分自身の不幸を現実のものとして、探り当てることが出来ていたからである。」と述べている（四五頁）。

13 竹内美和、前掲書、五八頁。

14 三上満『明日への銀河鉄道』（新日本出版社、二〇〇二年）、六五頁。

15 「三、家」における母親との会話を参照。

16 なお、筆者が台湾で確認できた（最初の翻訳と思われる）一九八六年から二〇〇五年にかけて翻訳・出版された八種類の『銀河鉄道の夜』において、この「坊ちゃん」という言葉は、「小老弟→小朋友→小傢伙→（小）少爺」という軌跡をたどっている。「小老弟」は軽蔑と、なれなれしいニュアンスがあるためか、最初の翻訳で使われただけである。最新の四冊の内三冊で使われている「少爺」が主流といえよう。「小朋友、小傢伙」は主に「小さい」、「幼い」の意味であるが、「少爺」は「若い」よりも「いい身分の」というニュアンスが前面に出るため、この言葉を気にするジョバンニは、「年齢」よりも「家庭」を馬鹿にされた気分になる。日本語の「坊ちゃん」に含まれる多様なニュアンスが垣間見える。

17 脇明子、前掲論文、一五二頁。

18 讃美歌を聴いてハンカチを顔にあてたかほる子の描写の直後に、「ジョバンニまで何だか鼻が変になりました」とある。また、孔雀の場面でも、カムパネルラに答えるかほる子の言葉の直後にジョバンニの疎外感が描かれている。

19 中地文「ジョバンニの悲哀――少年小説「銀河鉄道の夜」とは何か」[『宮沢賢治』十七号（洋々社、二〇〇六年）]、一〇八頁。